No. 014

カンボディア国
難民再定住計画(「三角協力」)

中間評価調査団報告書

JICA LIBRARY
1209170[8]

平成6年11月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

青 派 一
J R
94-07

1209170[8]

序文

カンボディアの「難民再定住計画」は、９２年３月に始まったタイ国境からの難民帰還に際し、その再定住促進を目指して、人口の８割が従事する農業を中心とした農村基盤整備・農村地域開発を行う、日本とアセアン各国との共同プロジェクト（通称「三角協力」であります。

農村地域開発の協力活動は、９４年４月から９５年３月まで協力機関１年の予定で開始され、協力隊から派遣されたシニア／短期緊急隊員（当初１０名、現在９名）をはじめ、インドネシア、マレイシア、フィリピン、タイの４カ国から、現在、４７名の技術専門家が、コンポンスプー、タケオの両州において、様々な分野で技術協力を進めております。

協力開始から半年を経過する時点で、プロジェクトの「モニタリング（中間評価）」を実施することがかねて決められており、カンボディア政府の地域開発庁をはじめ、関係各国大使館、各国専門家のチーム代表による「モニタリング活動」が９月１２日から始まりました。

これに当事務局から、オブザーバーとして参加するため、本調査団が派遣されたものであります。

本報告書は、同調査団による調査結果をとりまとめたものであり、今後、本プロジェクトにおいて広く活用されることを願うものです。

平成６年１１月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局
事務局長　　高橋　昭

09510

＜目次・続き＞

Ⅱ）関連・添付資料　　ページ

① JICA カンボディア事務所の注意書「94.9.1 調査団の皆様へ」　３０
② 「三角協力・モニタリング」にかかるカンボディア政府発出の公文書　３１
③ 同 プロジェクト地域略図　３５
④ 同 モニタリング活動・現場視察の詳細日程　３６
⑤ 同 プロジェクト参加の専門家一覧表　４０
⑥ 同 国別専門家リスト　４１
⑦ カンボディア隊員派遣状況・配置図　４５

Ⅲ）参考写真　４６～

＜以上＞

報告書の要約

１．治安状況がよくない。ＫＲ（クメール・ルージュ）の動きのほか、一般犯罪も多発している。「三角協力」の活動は、コンポンスプー・メインセンター止まりとし、それから西には出動していない。カンボディア事務所は、治安上の注意喚起を強調している。

「三角協力」の評価に当たっても、治安問題を考慮に入れる要があり、活動の範囲は限られているが、その中で成功・成果を見ることが求められている。

２．「三角協力」の現場活動視察や、隊員報告書等から、治安状況、安全確保が、最大の問題と考える。万全の注意・対策には、関係者間の迅速・正確な情報活動と、当事者の安全確保への不断の留意が基本である。具体的な対策を提案すれば、無線機の配布の徹底、「安全会議」の常設による情報活動の一層の強化、「安全地図」・関連情報の掲示、トラムクナーでの安全対策、等が挙げられる。

トラムクナー宿舎については、安全面と合わせて設備面の改善を、別に、隊員・専門家の活動・生活両面にわたる支援を計る要がある。

３．現場活動視察から受けた印象をいえば、数々の困難はあるものの、全体として、予想以上に成功裡に動いている。特にアセアン技術者たちが、快活に胸を張って活動状況を説明していたのが印象的で、かれらの技術活動がカンボディアの現実に適合しそうに思われる事例が少なからずあった。初の「南々協力」の試みは、良好な始まりといえそうである。

その中にあって協力隊のシニア／短期緊急隊員は、落ち着いて淡々とそれぞれに活動を進めていた。プロジェクトが、現地住民の自立を考え、外から資機材を持ち込まず、労働力を含む現地の資源を生かす方針を堅持し、村民と密着して「草の根レベル」で動いているのが印象に残った。

４．「三角協力」「南々協力」の実を上げるには、プロジェクトの延長によって、技術活動の普及の仕方、村民の納得・理解に取組み、かつアセアンの国ごとに固まらず、分野ごとに隊員・専門家間で情報・意見交換を進め、共通の目標を立てて共同して活動できるようにすべきである。今後とも、隊員、特にシニア隊員の役割を、その面で期待したい。

５．「三角協力」への協力隊派遣が、シニア隊員と合わせて新規隊員を派遣することになるならば、合格者に対し訓練入所前に、活動形態、安全問題を主に、経過・状況をよく説明して本人の意思確認を行い、さらに訓練期間中には、特別の時間を増設して、注意と指導を徹底することが必要である。その結果、派遣辞退者が出た場合の対応も、あらかじめ検討して方針を立てておくことが望ましい。

＜要約は、以上＞

出張の目的

カンボディア難民再定住計画（通称「三角協力」）にかかる中間評価調査。

注記すれば、次の通りである。。

カンボディアの「難民再定住計画」は、９２年３月に始まったタイ国境からの難民帰還に際し、その再定住促進を目指して、人口の８割が従事する農業を中心とした農村基盤整備・農村地域開発を行う、日本とアセアン各国との共同プロジェクト（通称「三角協力」）である。

農村地域開発の協力活動は、９４年４月から明年３月まで協力期間１年の予定で開始され、協力隊から派遣されたシニア／短期緊急隊員（当初１０名、現在９名）をはじめ、インドネシア、マレイシア、フィリピン、タイの４ヵ国から、現在、合計４７名の技術専門家が、コンポンスプー、タケオの両州において、様々な分野で技術協力を進めている。

協力開始から半年を経過する時点で、プロジェクトの「モニタリング（中間評価）」を実施することがかねて決められており、カンボディア政府の地域開発庁をはじめ関係各国大使館、各国専門家のチーム代表による「モニタリング活動」が９月１２日から始まった。

これにＪＩＣＡ／ＪＯＣＶ本部からオブザーバーとして参加するため、３名の出張者が、９月１１日から１８日まで、カンボディアに出張したものである。

出張者・団員の構成

１．国際協力事業団・青年海外協力隊事務局　技術指導委員（通称・「技術顧問」）
松　崎　孝　雄

２．同　　・同　　派遣第１課　職員
飯　田　鉄　二

ほかに、国際協力事業団・派遣事業部　派遣第１課から、職員　深　沢　公　雄が同様の日程で出張し、上記・中間評価調査に、３名が参加した。

出張日程（1994年 9月11日～同年 9月18日）

月　日	曜	日　　程	<宿泊地等>
9月11日	（日）	11:00 東京発（TG-641）	
		15:30 バンコック着・AMARI Airport Hotel にチェックイン	<バンコック>
12日	（月）	10:50 バンコック発（TG-696）	
		12:00 プノンペン着・Diamond Hotel にチェックイン	
		14:30 ＪＩＣＡカンボディア事務所表敬・渡部所長ブリーフィング	
		15:30 日本大使館表敬・今川大使に挨拶、今村、塚本両担当書記官と打ち合わせ	
		16:30 「三角協力」守屋プロジェクト・マネジャーと打ち合わせ（斎藤同アシスタントおよび渡部所長同席：カンボディア事務所）	
		18:00 渡部所長主催夕食会・事務所員と懇談	<プノンペン>
13日	（火）	7:00 ＪＩＣＥ事務所に参集・「三角協力」モニタリング活動初日の現場視察に出発	
		18:00 プノンペンに帰着（飯田職員はトラムクナー・センター宿泊）	<プノンペン>
14日	（水）	7:00 ＪＩＣＥ事務所参集・モニタリング活動２日目の現場視察に出発（飯田職員はプノンペンに戻り、小野原隊員の帰国関連業務等）	
		17:00 プノンペンに帰着（深沢職員はトラムクナー・センター宿泊）	<プノンペン>
15日	（木）	7:00 ＪＩＣＥ事務所参集・モニタリング活動３日目の現場視察に出発（飯田職員は、プノンペン市内隊員活動視察等）	
		16:00 プノンペンに帰着（飯田職員は協力隊連絡所に宿泊）	<プノンペン>
16日	（金）	8:00 プノンペン市内隊員活動視察にホテル出発	
		8:30 プノンペン大学　　秋山／ＳＥ、岡野／日本語・両隊員	
		9:30 プレアコッソマ訓練校　平沢、馬渡、富沢／３職業訓練隊員	
		10:30 市内見学・中央市場等	
		12:00 隊員との昼食懇談会（所長主催：前記５隊員と高橋／卓球隊員）	
		14:30 「三角協力」モニタリング活動集約の会議（日本大使館）（深沢職員は、バンコックに向けて帰路につく）	
		18:00 モニタリング会議出席者との夕食会	<プノンペン>
17日	（土）	市内・周辺地域見学、資料整理	<プノンペン>
18日	（日）	10:45 プノンペン発（MH-755）	<次の出張目的地へ>

Ｉ）カンボディア 出張報告

１．カンボディア事務所および大使館表敬――最近の首都および周辺の状況

１－１　カンボディア事務所の情報、見解等――渡部正剛所長の説明概要は以下の通り。

①治安状況には、政治的事情と一般事情がある。政治的、とは、ＫＲ（クメールルージュ）の動きで、プノンペンから南の１～４号線は一応比較的に安全といわれるが、ＪＩＣＡの事業活動に関していえば、国道４号線のコンポンスプーの町から先には行かないことを厳に通報している。

②４号線の西端、保養地・観光地のシアヌークビルは危険であり、現に事件が起きた。去る７月末頃、日本人ツーリストが民間タクシーでの帰り道、安全な時間帯であったが、検問（政府側かどうか読み切れない）で停止せず、水平撃ちされて肩甲骨から上を射抜かれた。幸い内臓は無事であったが、厳に要注意。

③コンポンスプーに近く、ＫＲが潜んでいる山があり、「三角協力」の活動に関しては、コンポンスプー・メインセンター止まりとし、町から８．８キロ西北のサムロントン・サブセンターには出動していない。なお、国道３号線は、道路状況が整備不良で雨で寸断され、４号線を進まざるを得ない状況がある。

④本邦からの出張者・調査団には、注意書きのメモ（別紙・資料「94.9.1　調査団の皆様へ」・を参照）を手渡して治安上の注意を喚起し、プノンペンから地方へ出る際は、朝７時以降の出発、夕方４時までに市内に帰着するようお願いしている。ＫＲとはいえない一般犯罪が多発しており、薄暮から明け方が危険であり、オフィスも午後６時には帰路につき、やむを得ない業務で６時にはどうしても無理な場合でも、最大限７時には帰路につくようにしている。ひったくりや強盗が絶えない。今年４月以降は、武装集団による現金、宝石類を狙う家屋侵入型の事件が増えてきた。

⑤事務所の公用車６台（１台は協力隊専用）も、上記の６時以降はオフィスから離れて分散し、ホテル等比較的に安全な駐車場所に移動する。大使館と内務省との協議に沿い、昼間２名、夜間４名の現職警察官がオフィス警備に当たっている。通常はピストル、夜間は小銃を携帯する。協力隊の連絡所は、警備員２名だけ。隊員の住居は月 300～400米ドルの範囲で、知人・関係者の紹介状をもとに、適当な住まいに入居している。

⑥在留邦人は、大使館に登録した人数が 140人ほどと聞いているが、それ以外にＮＧＯ関

係で50人、別に一般旅行者がいる。ＪＩＣＡを主に援助関係者が多数を占め、商社、企業は現在１８社がいる。外国人で多いのはフランス人が援助関係者をはじめ 1,500人から 3千人といわれ、国際機関ではＵＮＤＰ、ＷＨＯ、ＵＮＩＣＥＦ等が活動している。

⑦無線網は、ＪＩＣＡ事務所をキー局として、「三角協力」守屋リーダーと常時連絡が取れる態勢にある。周波数は、カンボディア当局から許可を取って活用している。専門家・協力隊員全員とまでは徹底されていない。公用車は無線付きが３台である。
（ちなみに、ＪＩＣＥ事務所、トラムクナー・センター（共同宿舎）、リーダー、サブリーダー、ＪＩＣＡ所員間は、常時無線連絡が行われている）

１－２　今川大使、および関係書記官に挨拶、意見交換

①今川幸雄大使の話（渡部所長、技術協力担当の塚本書記官同席）

「三角協力」は、初めは難民再定住に協力という考えであったが、今は、名実ともに、農村開発協力事業である。日本の協力隊員もアセアン４ヵ国からの専門家も、予期以上に立派に活動し成果を上げつつあると承知している。今回のモニタリングに際しては、治安その他の問題はあるだろうが、よい面をみてほしい。またこの協力計画を成功させるという観点で見てきて頂きたい。

カンボディアから、１年の計画ではなく２年延長の要請が出ているので、その方向で考えてほしいが、協力隊員の参加は、現在活動中のような隊員経験者と、新規に派遣される隊員とが、組み合わされて活動できるように配慮できればよいが、と思っている。

「三角協力」は、満点を百点とすれば、そのうち私たちではいかんともしがたい治安問題を２０点差し引いて８０点満点として考えてほしい。現時点では、私は７０点といいたい。残り１０点は、日本側でもう少し「ハード面」を増強すれば、と考える。施設・設備にもう少々考慮できれば、８０点は可能だと思う。

安全対策は万全を期している。プノンペン市内、「三角協力」の活動区域の他は、シエムレアップの空港・市内、アンコールワット周辺は、治安が確保されており心配はないが、その他の地域については警戒が必要である。（治安問題、ＫＲ等についてさらに説明あり）

②今村、塚本両書記官との意見交換（渡部所長同席）

今川大使の話を踏まえて、協力隊員の活動現況、今後の派遣計画等につき意見交換した。席上、今村書記官から、「三角協力」に関し、カンボディア政府より、２年間の協力延長の要請が公式に提示されている旨述べられた。

また、２年延長を前提として、プロジェクト・マネジャー（略称「ＰＭ」、リーダー）の下に、アシスタントＰＭを１名増の方向で検討中の旨も述べられた。

２．「三角協力」と、その「モニタリング活動」への参加

通称「三角協力」・農村地域開発協力プロジェクトは、本・平成６年度の１年間を協力期間として進行中である。去る５月７日、本プロジェクトのＪＣＣ（合同委員会）において決定された「モニタリング」（中間評価）の実施が、９月１２日から２週間にわたって実行されることになり、ＪＩＣＡ本部から、この時期に合わせて３名が出張し、「モニタリング活動」にオブザーバーとして参加した。

協力隊事務局に関していえば、本件協力の開始前からこれまでに関係職員のカンボディア出張が相次いできたが、「三角協力」に派遣された協力隊員１０名（シニア１名、短期緊急派遣９名）が、協力地域内のトラムクナー・センターを本拠に協力活動を開始して以後は、今回の出張が最初になる。

従って、今回の松崎、飯田両名の出張は、次のような趣旨と意義とがあった。

①派遣隊員の現地活動を、初めて視察する、

②トラムクナー・センターでの生活事情も初めて見聞する、

③派遣隊員と、現状および当面の問題、今後の計画等について懇談し、意見交換する好機となる、

④「モニタリング」参加により、アセアン４ヵ国専門家の活動状況を合わせて視察し、現状を把握し今後の展望を描く、

⑤今後の協力隊員派遣の方向、および問題点とその解決の方策を検討する。

以下、順を追って「モニタリング」参加について記述するが、関係資料を示すと、次の通り。<添付②、等の「マル数字」は、末尾の添付資料のナンバー>

添付②　「モニタリング」にかかるカンボディア政府発出の公文書

〃　③　プロジェクト地域略図

〃　④　現場視察（site observation）の詳細日程一覧

〃　⑤　プロジェクト参加の専門家一覧表

〃　⑥　同　国別専門家リスト

なお、以下の記述において、本件協力は、「三角協力」あるいは「プロジェクト」と、そのプロジェクト・マネジャー（RD&RP=Rural Development and Resettlement Projectの Project Manager=略称「ＰＭ」）の守屋幡司氏は、単に「ＰＭ」と、また参加５ヵ国の National Team leaderは、単に「リーダー」と、それぞれ略称する。

２－１　守屋幡司ＰＭとの打ち合わせ、および意見交換（ＪＩＣＡ事務所にて。ＪＩＣＥ斎藤氏・Assistant ＰＭ－Ⅱ、および渡部所長同席）

①まず守屋ＰＭから、この日・９月１２日午前中に開かれた「三角協力」にかかるモニタリング開始の会議について説明あり。すでに当方に（出発前に）連絡・通報があった通り、モニタリングの日程および実施方法が決められ、モニタリングの中心をなす現場巡回視察活動（Site Observation）が、１３～１５日の３日間実施、当方がオブザーバーとして参加することも了承された。

②続いてＰＭから日程、行程の詳細説明あり。要旨は次の通り；

a.プロジェクト現場活動を３日間に全部巡回する。協力隊員・アセアン専門家の全員・４８名の活動場所を洩らさず回り、現場で当事者に説明を受け質疑応答する計画。

b.安全を考慮して、行程、時間表を作成した。毎朝７時にＪＩＣＥ事務所集合し、７時１５分にマイクロバスに分乗して揃って出発する。往路は、初日３号線、２日目２号線、３日目４号線を走り、それぞれの関係区域を時間表に基づいて巡回するが、帰路は、３日間とも最も安全な３号線で、遅くとも午後６時前にプノンペンに帰着予定。

c.１６日は、モニタリングの要約を協議する会議を、参加者全員出席してプノンペンで開く。

③次の関連情報・説明あり。カンボディア政府の主管省として「地方開発省」（Ministry of Rural Development ）設置の計画と聞いているが、政府機関・省庁の設置法が未設定の現状で、早く整備してほしいと思っている。

また、プロジェクトの体制として、ＪＩＣＡ事務所・大使館に提出する、１０月３１日締切りの専門家派遣要望調査に、アシスタントＰＭ・１名増を要請。

④出張者３名の日程計画を、前記②に基づき相談し、３日間の「モニタリング活動」参加について、次の通り予定した。

a.松崎は、３日間の行程に、すべて参加する。

b.深沢は、初日、２日目の行程に参加。２日目はトラムクナー・センターに宿泊し、３日目は派遣専門家関係の日程に移る。

c.飯田は、初日の行程に参加後、トラムクナー宿泊。２日目も参加、３日目は、「三角協力」以外のプノンペン在勤隊員関係の日程。（ただし２日目は、小野原隊員の突然の帰国に伴い、予定を変更し参加できなかった）

d.事務所からは、初日に渡部所長、２日目は森田企画調査員が参加、３日目は未定。（結局、３日目は事務所から参加できなかった）

２－２　プロジェクト派遣のシニア／短期緊急隊員の活動状況（モニタリング日程順）

２－２－１　モニタリング初日（９月１３日）

国道３号線周辺区域、コンピセイ・サブセンター、および共同宿舎のトラムクナー・センター

＊最初に視察予定であった小野原孝隊員の活動（陶磁器）は、同隊員が体調を損ねて同日急遽帰国の方針と決まり現場に不在のため、視察予定は取り消しとなった。

なお。小野原隊員は、この日のモニタリングに際して、次のメモ（原文のまま）を記述していた。

The Cambodian Counterpart: (Name) Livan Yary　(Status) Artist
Location: Wat Prei Totung
Progress of the Activity: Build a workshop at Wat Prei Totung and have prepared some tools and equipment for ceramic.　Bought two kinds of clay.(Clay KAMPORT; Clay KOMPONG SAOM)　Made a form to make relief of TEVADA.
The electric pot which I purchased will arrive there within one week.
Support for the Activity (Follow-up Cooperation): We should buy a big pot to Product a large quantity of souvenir in order to level up quality of ceramic in Cambodia.

＊中西加津隊員（家政）の活動を、コンピセイ・サブセンターで視察。同センターの広いホールを「教室」として、一日にＡ～Ｄ４クラスの生徒に洋裁を指導中。Ａ組の授業開始 07:30 (～09:00)から、Ｄ組の終了 16:15まで（各１時間半）、月～金の週５日フル活動している。現在 133名が参加、希望者をすべて「入学」させたので多人数に上る。これまでに２８名が途中「退学」した由。視察時は、Ｂ組の授業中で、中国製のミシンを使用、糸・針・布（材料）の支給を受け、小学生用の制服を製作していた。学童に供与する計画とのこと。クラス指導により技術を身につけたならば、自力でミシン等を購入して将来の自立を目指すという。

＊コンピセイ・サブセンター区域からトラムクナー・センターへと移動する途中の野原の中に、この一帯では目に付くほどの綺麗な建物が見える。プロジェクトが、インフラ整備事業で余った資材を提供、住民の労力だけでリハビリした学校の校舎であった。ＰＭの説明によれば、協力地域内の学校の整備は、建設・修理のための資材を確保し、住民が労働を提供して自力で復興するよう指導しており、野原の中の２棟は、いずれもかくして完成をみた学校であるとのこと。

＊トラムクナー小学校の校庭（といっても野原に近いが）で、原口明久隊員（技術科教師）とマレイシア派遣の専門家２名の活動状況を視察。原口隊員とマレイシアの４名の専門家（本来は、Income Generation 活動を建築、大工の分野で担当している）は、一つのグループをつくり、教育プロジェクト支援＝学校建設、修理のプログラムに従事している。

同隊員およびＰＭの説明で、この学校は、既存のいかにも貧弱で危険な教室を潰し、新たに煉瓦・ブロック積みの４教室を新築する計画。必要な材料から労力を現地でまかなう方針を伝え、村の人々が同意しコンセンサスがつくられ取決めができたので、９月１日に作業を開始したばかりであった。原口隊員によると、現在村人により基礎固めのコンクリート工事中で、６ヵ月以内の完成を目指している。なお４教室の建設は、１万ドルの経費である由。

ＰＭの話では、上記のコンセンサスづくりが、プロジェクトとしても隊員も苦労であるが、住民たちが自分たちで学校を造るという意識を大事にして、労力提供に同意・合意が得られることが前提。得られなければ後回しにし、可能なところから実施。建築技術は、マレイシアの専門家たちが現場で指導する、とのこと。

＊トラムクナー・センターの視察と昼食

トラムクナー・センターには、５ヵ国４８名の協力隊員・専門家が、共同で宿泊している。（翌１３日に小野原隊員が帰国の途についたので、以後１名減の４７名。ＰＭとアシスタントＰＭ１名とが毎週交替で駐在）　以下は、現況と、とりあえずの感想。

施設は、二重の有刺鉄線で囲まれ、出入り口は、いわば「正門」１ヵ所。（安全への配慮と理解している）　中庭が広く、正面にプロジェクト・オフィスが、左手に広い共通棟（食堂、炊事場、「娯楽室」等）がある。「正門」から見てそれらの両翼に、右手３棟、左手２棟の宿泊棟が並ぶ。いずれも木造平屋建てである。以上の建物配置状況および外観は、おおむね良好と考えられる。

各自の宿泊室は、ベッドに机と椅子、洋だんすが備わって一応の起居に支障はない。最小限のプライバシー保持は可能であろうが、①隣室との関係（ラジオ、音楽、声や物音など）、②気温（暑さ・寒さ）、換気などの調整（窓に網戸があるが、ドアにはない）に、難点があるように感じられ、別に項目を立てて後述するように、対応・対策の必要が考えられる。

食堂は広いスペースを取っており、イスラム教徒に配慮して、キッチン、食器、テーブルなどを分けている。「娯楽室」は、ビリヤード設備、雑誌・単行本の棚、それに自費で作ったという「バー・ラウンジ」がある。これらも、最小限度の施設で、今後の対応・対策を後述する。

「正門」を出て間もなく国道沿いに、トラムクナーの町がある。隊員によれば、２軒の適当なレストランがあって、２軒を昼と夜とに分けて食事に出る由。徒歩で行けるが、センターの門限が午後７時であり、夕食はかなり忙しいようである。

その１軒で、モニタリング一行のうち、日本人とカンボディア人との十数名で会食した。店での食事に当たっては、①飲み物（沸かしたお茶）に、氷を入れるのを避ける、②食器や箸・スプーン等をティシューで拭く、程度の配慮をする以外に、特に留意すべき事項はないようである。

なお、食事それ自体は、鳥、豚、牛肉や、水産物・魚類が出され、内容も味つけも、至って良好であった。

＊上野恭子隊員（公衆衛生）の活動地・Komar Richia Commune Health Centerは、スタッフがセンター外に巡回活動に出て不在のため、同隊員の活動については、トラムクナー・センターで聴取。以下、同隊員の説明の概略。

Commune の村々に出向き、1,300 家族についての基礎調査が終了したところ。データを集計中であるが、その結果により水の検査を加える必要があるので、村々の井戸と池の点検を始めている。１０月からは、活動計画に沿って、衛生改善・健康についてのレクチャー開始の予定。フィリピンの専門家の一人・ Ms Lolita（Food Processing ）が、同隊員の担当する区域の村で栄養教育の話をした由。有益につき続けてほしいと要望。

２－２－２　モニタリング２日目（９月１４日）

国道２号線、タケオ・サブセンター等

＊タケオ州の家畜衛生事務所（Provincial Veterinary Office）で、木下秀俊隊員（獣医師）が、ここでの活動状況を、資料・写真を回覧して説明。オフィスのスタッフは村に巡回出動中で不在。

事務所の活動は、診療用具の配布；整備、疾病のレポートがあれば薬品の供給；Anthrax （炭疽病）発生時の処置； Hemorrhagic Septicemia （敗血症）検査のための血液採集、等々。家畜の移動が統制されておらず、相互に接触する度合いが高いために、伝染疾患が簡単に広がりやすい。敗血症、炭疽病などの処置は至難で、zoonosis（動物から人間に移される病気）もあり、過去に炭疽病に冒された牛を食べて３人が死んだという実例もあった由。また、疾患のレポートを受けても、車両に制約があって、直ぐに関係農家に出動することができない、という訴えあり。

木下隊員は、翌１５日・３日目の行程中、コンポンスプー州の農業局内に置かれている同州家畜衛生事務所において、タケオの活動と同様の活動状況を改めて説明した。

＊タケオの幼稚園（Takeo Kindergarten）で、野辺節隊員（幼稚園教師）が待機し、園内ホールで、活動状況説明を行った。

同隊員は、教育分野の協力活動に加わり、活動地域内の学校に調査活動に出向き（６月までに50校を調査した由）、建設・修理に Urgent （緊急）以下の５段階に分けて対応検討に当たっている。また、CARE JAPANからの寄贈教材を２校に配布、とのこと。

幼稚園は、小学校に併設を含めて 120校ある由。現在は、幼稚園の先生を集めたクラス（１クラス 20 人）で、幼稚園のカリキュラムづくりから、音楽、手工芸（紙細工など）、ゲームなどを教えている。この日のここでの授業は終わっていたが、３日目の巡回視察に際しては、コンポンスプー幼稚園において、20人の若い先生たちを集めたクラスで、キーボードを使って音楽の練習を指導中であった。

＊伊良波真正隊員（美容獅）が、タケオ孤児院（Takeo Orphanage ）で活動中。同隊員は Income generation 活動として、Hair-dressing を、タケオの町公営のこの孤児院で、７月２５日から９月２３日の２ヵ月間指導している。訓練中の若い生徒３４名（男１０名、女１４名）が孤児、また訓練生の「訓練対象」となっている子供達もむろん孤児。女性院長によれば、孤児たちは、男子４５名、女子２１名で、院長以下６名のスタッフが勤務している由。

伊良波隊員によれば、ここでの指導が終えて後は、コンポンスプー州内の新たな指導場所で活動を継続の計画だという。

＊スラコウ普及所・Slah Kou Agricultural Station において、小田島成良隊員（稲作・シニア）から活動計画概要の説明。（英文ないし邦文の各資料配布＝同一内容。添付の邦文資料参照）

４ヵ所（4 location）で、ポンプ貸出しによる灌漑を実行。ピーナッツ種子生産を行っている。合わせて村落調査を行い、農業計画の改善、前進を検討。これからは、①米作に淡水養殖の導入を計画、試行、②違う分野の農業専門家（アセアン各国派遣）との意見交換、協力を実行したい、としている。

活動現場に向かう矢先に雨が激しくなり、普及所の建物内で質疑応答。農民へのポンプ貸出しにより、ポンプの効用を指導。米の自給力がいまだに 90%であり、２期作を勧めつつ、当面の収穫後１１～１２月にポンプ・ユニットを利用・指導の計画、の由。１ユニット 380ドルで、農民グループで買えない値段ではないという。

＊雨中の悪路を走り込んで、Phum Dap Pou村の旧い公会堂の建物内で活動中の福田牧子隊員（看護婦）の状況を視察。

公会堂とはいっても、木造の旧い狭い建物で、土間の一部を舞台風に高くしてあり、四隅の太い柱に、内部の支柱と梁があるだけ。内部は子供を連れた母親たちで満員状態。

スラコウ普及所を中心とした活動計画の概要

小田島成良（稲作シニア）

1、目的

- 放置されている水源の利用
- 稲、食用作物の二期作化及び多毛作化、更にその栽培面積の拡大
- 食用米の自給化及び生計向上

2、発展目標

農民自身に依る灌漑ポンプの保有と灌漑組合活動の継続

3、計画の流れ

- 水源探し
- 水源近くの農民に対する灌漑計画の提案と組合の組織化
- 灌漑組合と三角協力側との契約合意
- 灌漑組合の管理による計画の実施

4、条件

- 灌漑組合は収穫量の１０％を農民から徴収する
- 組合員は燃料代を負担する
- 機材の点検、修理については三角協力側が責任を持つ
- 契約関係は１９９５年3月３１日に終了する

5、栽培計画

イ、多期作計画

近くに大きな周年水源を持つ計画地

- 早期第一稲作付け（苗代にポンプ灌漑を用いる）
- 雨季第二稲作付け（後期にポンプ灌漑を用いる）
- 落花生作付け（全作期にポンプ灌漑を用いる）

ロ、多毛作計画

水源能力が制限される計画地

- 乾季野菜作付け
- 雨季稲作
- 乾季野菜作付け
- 乾季野菜作付け

＊ポンプ灌漑に限界が有る為水瓶栽培も併用し灌漑水の節約に努める。

6、組合機能

- 灌漑ポンプの貸し出しと管理
- 種子の貸し出し、販売
- 肥料の貸し出し、販売

7、補足

- 落花生の種子はスラコウ普及所が生産し市場価格より安く組合員に提供する
- 始めの肥料は三角協力の活動経費で購入する
- 現金購入出来ない組合員は収穫時に組合に返済する
- それらの利益は計画の継続、特にポンプ購入資金として貯える

8、発展計画

- 本計画をこれ以外の同様灌漑適地に波及する
- 稲作養魚を展示しこの組合を通じて普及を図る
- その展示普及計画は普及所、スラコウ中学校及び三角協力側の協力で行なう
- 中学校と普及所の養魚池で稚魚を生産し希望組合員に頒布する
- 食用作物栽培に浅井戸灌漑と水瓶灌漑を試み水源能力に限界の有る地域への普及に発展させる

計画実施情況

１９９４年８月末現在

項目	調査	計画立案	準備	実施	拡大	継続	備考
機材、施設準備計画	■	■	■予算申請他	■	▶		ポンプ等の機材購入、管理事務所、他建設
組織化	■	■	■地域指導者との意見交換	■	▶		二集落に４７名の農民が加入
第一灌漑計画	■	■	■	▶乾季拡大計画中			１４２アール１３名
第二灌漑計画	■	■	■	▶同上			８２アール８名
第三灌漑計画	■	■	■	▶水瓶灌漑対象地			１３０アール、１６名
第四灌漑計画	■	■	■	▶			プレイネァック集落で３５９アール、２２名
落花生種子生産	■	■	■	▶九月作付け拡大			採種栽培はスラコウ普及所で実施
水瓶灌漑	■	▶					農民に対する展示と乾季導入
稲作養魚計画	▶	▶初の中学校との協同事業					タケオ農業局の助言に依り普及所と中学校が協力して実施する
浅井戸灌漑	▶						普及所で試みる
住民調査	■	■	■	■	▶		第四灌漑計画地にて計画中

□まだ実施に至らず　▶実施中　■実施済み

同隊員によれば、この日は子供達への予防接種が行われ、その好機に、保健所のスタッフたちと共同で、衛生教育、母子保健についての話をし、ＰＲに努めている。村民を集め、話・ＰＲを先行させ、その上で予定の接種をすすめる、という手順だそうである。

活動経過として、① Popularizing ORS(Oral Rehydration Salts) 、② Equipping physical facilities 、③ To assist popularizing immunization、と述べている。

２－２－３　モニタリング３日目（９月１５日）

国道４号線周辺、コンポンスプー・メインセンター、プロジェクト改修道路周辺等

＊田中修隊員（自動車整備）が活動中の農業試験センター（Preu Ohdau Agricultural Research Station）が、この日の最初の視察先であった。４号線からのアクセス道路は、凹凸が激しい上に途中で寸断され、４号線で車を下り炎天下をかなり歩いてゆく。同隊員は、アセアン農業関係専門家との共同活動があるほかは、このセンター（稲作試験場）で、農業省管下のメカニックに、各種機械の修理指導をしている。

ここの作業場は、屋根があるコンクリート床の広い建物であるが、損壊した機械類の中で sprayers を使用できるよう修理しながら、修理・管理方法を教えている。一方、この試験センターにあるすべての農業用機械の点検を行い、スペアパーツの整備等を進めている。作業場に隣接する倉庫２棟も、整理・整頓ができていた。

＊ Angmetry Primary Schoolと、 Slong High Schoolの修理工事状況を、いずれも原口隊員の誘導で視察。教育支援プログラムの一つであり、前者は、教室の内部から屋根の損壊がひどく、教員が男女総出で、工事に従事している。プロジェクトの方針として、修理工事の労力は、学校・地元が自力で実行することになっており、この小学校の場合は、男の先生が力仕事、女性が軽い業務を分担して行っている由。

後者の高校は、生徒 500名だそうで、建物は村民たちにより 60%出来上がっているが、なおドア枠や煉瓦工事を含む建設工事を残している。原口隊員のほかに、技術面で、マレイシアの２名の煉瓦積み・建築野専門化が協力・指導中である。

＊最後に、福田隊員のもう一つの活動場所・Phum Prama Cheng & Dam Tekを視察。以前はこの村の人民党のオフィスであった旧い建物の中で、子供連れの親達が密集しており、前日同様、健康・衛生の話と、続いて予防接種が実施されたところであった。

２－３　モニタリング活動４日目・９月１６日の会議（午後２時半～・日本大使館）

National Project Coodinator であるカンボディア国・地方開発庁の Ngy Cham Phal氏が座長となって開会。座長およびＰＭ・守屋専門家が、１３～１５日の３日間のモニタリング活動を集約し、座長から、カンボディア政府が本件「三角協力」プロジェクトの２年の活動延長を要請する旨を述べた。

座長が、今回のモニタリング参加者から、印象・感想・意見を順次述べるよう求め、アセアン４ヵ国大使館の担当書記官（フィリピンは大使館がないため、モニタリングに参加した在住フィリピン人代表）がそれぞれ発言、協力の延長については、特に異議は述べられなかった。

日本大使館のモニタリング参加の書記官が不在であったため、その代わりとして、座長から、３日間参加の松崎に発言の指名があった。このため松崎が、「オブザーバーであり、日本側の代表ではない」旨を断った上で、巡回視察の印象として、①協力活動が地域住民の自立を考え、現地で入手できる材料・資源を活用して草の根レベルで進められている、②各国専門家が、それぞれのチーム内で連携を計りつつ、特色ある活動を展開している、現況を評価して述べた。
続いて、各国のチームリーダー５名からの発言が相次いだ。

座長から、２年の活動延長を計る場合、各国の協力分野等について意見を求めたが、それについては、各国専門家が大使館とも連絡をとり、モニタリング・レポートがＪＣＣのChairman（ＪＩＣＡカンボディア所長）に提出される予定の９月２３日の会議で、改めて協議することとなり、２時間の会議を閉じた。

２－４　見聞・聴取・実感した事柄、および感想と意見

２－４－１　治安の問題と、その対策について

①プロジェクトの活動上、最大限の注意と対策を要する問題である。

本プロジェクトは、コンポンスプー、タケオの両州の一部に限られているが、まさに農村地域開発の協力事業活動であって、地域の平和・平穏を基本的な条件として進められるべきものである。治安上の無理を押してまで、極言をすれば、参加者の生命を賭して行う種のものでは決してない。

したがって、万一、治安上の事件がプロジェクトに起き、人命に関わる事態が生じた場合は、プロジェクトの存続について重大な対応を迫られると考えておかなければならない。

②ＪＩＣＡ関係者、プロジェクト当事者等から直接聞き及び、あるいは報告書類を読んで、プノンペン市内およびプロジェクト活動地域内で、勤務・住居の近辺にさえ、強盗・発砲事件が起き身辺の危険を感じることが少なからずあったことを承知している。

私たちの出張・活動参加の期間は、わずか１週間程度であり、幸いに同様の事件や状況は皆無で済んだが、今後、事態が好転するとは言い切れず、前記①のような事態にならないよう、万全の注意と対策を講じておくべきであると考える。

③万全の注意と対策とは、こと「安全」についていえば、関係者間の迅速かつ正確な情報活動と、当事者の安全確保についての不断の留意、が基本であり、それに勝るものはないといっていい。

その上で、具体的な対策として、次のことが考えられる。（順不同）

いずれも、これまで在外で計画し実行した事例であり、これですべてというわけではなく、また現に実行されていること・すでに措置が講じられていること、があると思われるが、それらにかかわらず以下に記す。

▼無線機の配布の徹底――携帯無線機を、すべての専門家、ないしすべての活動地（共同活動の専門家の場合に、例えば２名に１台など）に配布する。随時、テストを繰り返し、実用に遺憾がないことを期する。

▼情報活動・情報収集の一層の強化――大使館、ＪＩＣＡ、ＪＩＣＥ、トラムクナー間の常設「安全会議」ないし「安全委員会」を定期的（少なくとも週１回）に開く。
安全確保が目的であるから、Facts については正確に交換・伝達し、対応策を立てる。
安全／危険度を、例えば記号、数値などで定めて徹底することも一策。

▼「安全地図」、関連情報の掲示――少なくともＪＩＣＥオフィスおよびトラムクナー・センターに、専用の掲示板を設け、安全、事件発生、要注意等の「地図」／情報を、英文で（要すれば邦文でも）掲示して、常時注意喚起を計る。

▼隊員・専門家間の「安全委員」の設置――５ヵ国から１～２名の「委員」を選び、日常の情報交換、プノンペンとの連絡、対策考案等を行う。例えば、夜間を利用して週２回３０分程度開き、定例化する。
上記の趣旨で、随時、現地住民の代表を加えることも一策であろう。

２－４－２　アセアンとの共同活動について

①当初の「三角協力」が、分野ごとに協力隊員を中心に１０人のアセアン各国青年と組んだグループ活動の形態を予定した経緯があり、派遣中のシニア／短緊隊員の間には、そのような形態ではない現在の、それぞれがいわば「個別化」した活動に、疑問なり当惑を感じる者があるように見受けられる。
しかし、各国の派遣過程で、比較的な高齢者・経験者も含まれ、分野ごとの人数や派遣のタイミングが異なり、さらに、派遣後の状況として、活動区域の制約や国ごとの「チーム化」があって今日の活動形態が出来上がったと思われ、アセアン諸国による「南々協力」の初の試み、という現状を考えれば、前記の経緯通りにいかなかったことは、それはそれで理解できるように思われる。

②したがって、筋書き通りでなかった、あるいはそのことの良否・当否をいうよりも、むしろ、現状に、活動上不都合な点があれば、それをどう改めるのが適当か、あるいは、国別に「チーム化」して固まるのではなく、分野別の情報・意見交換を活発化して相互の連係を密にする、など、プロジェクトの前進、という観点で考えることが賢明であろう。

③しかも本プロジェクトは、前述のように、「南々協力」をアセアン４ヵ国が共同で取り組む初の試みであり、その意義について認識をさらに深めつつ、プロジェクトの諸活動においてはもとより、その周辺の、安全確保や日常生活の面でも、協力隊が出来る役割について、今後とも論議を重ねてゆくことが、なかなか重要な課題であるように思われる。

２－４－３　Ｃ／Ｐの問題等、受け入れ体制について

①隊員の報告書等から、Ｃ／Ｐの待遇、資格要件、力量などに問題が少なくないように読み取れる。しかしながら、率直に言って、モニタリング活動の行程で、個々の隊員・アセアンの専門家から、Ｃ／Ｐや受入れ側の事情について意見を聞く余裕は、時間上も話題上

も、皆無に近かった。したがって、これらについて意見を述べる条件は限られているが、以下に私見を述べておく。

②モニタリング中に感じ・気付いたことを記すと、巡回した現場で、特にアセアン派遣者の中に、C／Pを積極的に紹介し、そのC／Pが、専門家と一緒に説明や質疑に加わる場面が幾つかあって印象に残った。

また、C／Pの肩書きを見聞するところ、単に「Farmer・農民」や「NGO（民間人という意味か）」等がかなりあった。おそらく現時点では、力量あるC／Pが、政府・州のスタッフとしては得にくいのではないか。そのような事情もあり、隊員・専門家の活動が、とかく“役務提供型”“請負い業務型”になりがちになるのではなかろうか、と思われる。

③それらを考え合わせれば、これまでは非力に感じられても、現在のC／Pを活用し・激励し・有効に活動させ、協力期間が延長になれば当然に評価されるべき技術移転の進捗度を、今後は、意識的に、高めるために努力をしなければならないであろう、と考える。

技術協力の経験・教訓を積んできた協力隊としては、アセアン専門家たちが、どのような考えをもってC／Pと接し、どのような期待を持っているかなど、隊員の側から彼らの意見を聞き出したり意見の交換を進めて、C／P問題の改善・前進に資することを、むしろ期待したい。

２－４－４　トラムクナーの宿舎

トラムクナー・センターの概況と、とりあえずの感想は、「モニタリング２日目の行程」中で記述したので、ここでは、問題点と、今後の対応・対策について述べる。なお、私たちの一行３名のうち、飯田職員が９月１３日、派遣事業部・深沢職員が同１４日にそれぞれ同センターに１泊している。

念のために注記しておくと、両職員の報告および感想・意見については、別の記述とし、以下は、松崎の意見である。

ア）同センターにプロジェクト関係者全員が合宿する現状についての考え方

①派遣中の隊員からの報告書には、宿舎についての不満が記され、安全面の不安、プノンペンに宿舎を置く方がベター等の意見も述べられている。

なるほど、安全が百％確約されていると言い切れるわけでなく、個室のプライバシーは十分とは思えず、またプノンペンからの方が「通勤」上便利な者もあるであろう。５０名近い集団が１ヵ所に住むには、多々問題がありそうにも思われる。報告書の記述が、間違っているとは言えない。

②しかし、それでは、５０名に近い隊員・専門家が、２ヵ所以上に分散して宿泊する場合の方が、安全面をはじめ、居住条件やプライバシー等、格段に良好と言えるかといえば、そうは思えない点が少なからずありそうに思われる。

前述 a.)の通り、安全確保はプロジェクトにとって最大の問題であり、不安要素はＫＲの動きだけではなく、一般犯罪、プノンペンの治安、連絡・警備の体制などを含め、総合的に十分な検討を経て、考えられる範囲でのベストの対応が求められる。

③私見をいえば、i)プロジェクト自体として解決できない「治安状況」という難題を前にして、かつ、ii) 現下の、アセアンとの共同・単年度予算での対処等の諸条件のもとで考えると、「治安」の問題をさほど配慮しないでもよい条件下であるならば合理的とは言えない方式であっても、今ここで考えられる範囲でのベストの対応を求めるとすれば、「トラムクナー・センター合宿」以外に、適当な方策はないのではなかろうか、ということである。

④もし、その認識が適当であるとするならば、当面の「治安状況」に変化がない限り、トラムクナーの安全の強化、居住条件の改良・改善を計り、不安・不満はもとより問題点を、最大限軽減することが現実的な対応であろう、と考える。

イ）安全面での対策

前述 a.)で記した対策とは別に、前記ア）の認識に立ち、宿舎の安全・防衛という点に限って言えば、次の通り。

①今回の出張に先立ち、東京での打ち合わせ会議の際に語られた「センター正面の補強」については、今後のＫＲの動きとも合わせ、早期に実行すべきであろうと考える。
②センター周辺が夜間は暗闇であるのに、センターだけがこうこう（煌々）と明りに照らし出され、標的にされる危険がないか、という声を聞いた。砲爆撃や組織的なゲリラ襲撃が予想されれば再検討がぜひ必要と思われるが、一般的に夜間の安全・犯罪防止には、照明がきわめて有効と言われている。プロジェクトとして、絶えず情勢を見つめ情報を収集しつつ、隊員・専門家間の不安感を減退・解消させるよう努力すべきであると考える。
③そのためにも、a.）で述べた、トラムクナーでの「安全委員（会）」での相談・協議、ＰＭはじめプロジェクト幹部との連絡・意見交換が、きわめて重要であると考える。

ウ）設備面での対策

協力延長が具体化し、活動の継続が決定される機会に、居住条件の改善について、隊員・専門家から希望・意見を十分徴し、可能な改善を実現すべきであると考える。

差し当たり考えられること、としていえば、次の通り。
①個室を中心に、必要な場所に、虫除けの網戸の設置、等（すでに個室の窓や食堂等に網戸が設けられているが、例えば、個室のドアにも、等）
②分野・職種ごとないし国ごとの会議、「安全委員」会議等のための「中、小会議室」の新設（複数が必要であろう）
③スポーツ、レクリエーションのための施設・設備（原口隊員の報告書中に「スポーツ施設の建設」が記され、バレーボールコート、バドミントンコート完成とあるが、今後ともプロジェクトとして十分な支援措置を期待する）

エ）隊員・専門家の活動・生活両面の支援

＜業務活動上の支援＞
隊員報告書には、業務用の車の数が足りず、村落巡回・調査活動やＣ／Ｐ同行に不便を来している、との訴えが少なからずあった。前にもふれた通り、モニタリング活動中には、隊員等から各様の意見や問題を聞く時間がほとんど取れなかったため、実際にどのような

不備・不便が起き、ないし解決されないでいるか、残念ながら承知できなかった。

したがって、隊員の報告書を中心にしていえば、次のように考えられる。

①車の配置、活用は、農村地域開発の協力活動、特に巡回・調査を日常の活動とする分野・職種にとっては、業務上基本的な事項であり、必要時にC／P同道ができなければ、今後の技術移転に支障が起きる。配置・活用の仕組みを改善するとか、予算の差し繰りによって増車するとか、適切な措置を取ることが求められる。

②もし予算上の問題で、当面の解決が難しいのであれば、その旨を当事者に説明・納得を求め、理解を得るよう努めるべきである。同時に、プロジェクトとして、その打開のため、次年度の予算措置を約束できるように、可能な努力を示す要がある。

＜生活・健康管理上の支援＞

もう一つの大きい問題は、日常からの健康上の注意である。小野原隊員が急遽帰国を余儀なくされたような事例の再発は、ぜひ防ぎたい。

人それぞれに、生活のリズムや食事の好みが違うように、気分転換をどう計らうかは、十人十色に違うのであろうが、隊員間で、週末２日の過ごし方について聞くところ、買い物を兼ねてプノンペンに出て、１泊して休養する者はごく限られているようである。

プロジェクトとして、せっかく休日に、プノンペンへのシャトルバス・サービスを往復２便続けているのであるから、またＪＩＣＥオフィスには、宿泊できる部屋がある由であるから、それらを利用して気分転換を計ることは、自然でもあり必要のようにも思われる。

残念ながらプノンペンの治安は不良であり、また市外に出ることは禁じられているから、行動範囲は限られているであろうが、いわば「エンクロージュァ」の中で一週間の起居を余儀なくされていることを考えれば、そこから離れるだけでも、精神衛生上、簡易にいえば気分の上で、気晴らしになるはずだと考える。そのためにプロジェクトとして支援が可能なことがあれば（プノンペンでのイベントや entertainment情報などの提供、宿舎の便宜供与など）、考慮をしてほしい。

また、シエムレアップとアンコールワット一帯は、ツアーができる地域であるが、１回ならず２回往訪した者もあれば、一度も足を運んだことがない者もあるという。日帰り往復 180ドルの経費は必ずしも高いとは言えないし、また少々割高でも、健康管理、趣味や運動、気分転換に経費を惜しむべきではなかろう。

２－４－５　シニア／短期緊急隊員の意見・希望

詳細は、トラムクナー１泊の上、隊員との懇談の機会をもった飯田職員の報告によるところであるが、事務局から打診を試みた協力活動継続について、現在９名の隊員中、４名が、その可能性を述べている。

９隊員全員にあて、極力早期に、東京サイドの考え方を公式に（文書をもって）伝えるとともに、協力継続のための手立てである「シニア制度」について、またプロジェクトの今後の態勢（アシスタントＰＭの後任派遣、および増員の見通し）に関する専門家派遣の仕組みについて等（各人の進路希望に対する指導・相談を含む）の諸情報を送って（４名には、特に「追記」等を適宜考慮して）意思確認を計ることが、いずれも緊急に必要と考える。

小野原隊員を含む諸隊員から提出の報告書には、派遣１課がとりまとめたような「各隊員より疑問と思われている事項」があり、これらについても、上記の通報同様しかるべきルートで（できれば同時に文書をもって）回答を送ることを考慮すべきであろう。

２－４－６　その他の関連事項

かねてプロジェクトの管理体制、あるいは管理責任の所在について、現地サイドで問題視ないし問題提起の状況がある。

現地で注目し・承知したところでは、プロジェクト運営上、ＰＭとＪＩＣＥオフィス（アシスタントＰＭ１名を選定している）間の連携はきわめて良好であり、ＰＭによれば、予算計画とその執行上のイニシアをＰＭが確保し、特段の問題はないとのことである。

日常の様々な運営に際して、あれこれの意見があるであろうが、日本政府の予算編成、予算支出方式、ＵＮＤＰ・ＪＩＣＥ間の取決め、ＪＩＣＥ・ＪＩＣＡ間の関係等、本件「三角協力」の基本的な枠組みが変わり得ない以上、それをよく理解の上、当事者間の連絡と連携を緊密にし、諸活動の円滑な実施を目指す以外に、特別の方法はないと考えられる。

２－５　新規隊員派遣に当たっての留意事項

協力隊事務局は、派遣中のシニア／短期緊急隊員の任期満了に伴い、６年度３次隊から逐次、新規隊員を派遣する方針を立てている。ただし、これまでの経緯および協力効果、現に派遣中の隊員の活動成果等を踏まえ、シニア隊員の派遣も引き続き予定し、したがって明年４月以降は、シニア隊員と新規隊員とが共同して活動することになる。この方針は、かねてから事務局が対処してきた既定のものであるから、その方針に沿い、上記の派遣計画が実行に移されるに当たっての留意事項として、以下の意見を記す。

２－５－１　派遣前訓練に入所する前の措置

入所に先立つ極力早い時期に、派遣についての本人の意思を一応確かめた上で、事務局から直接、可能な限り面談の形で、責任ある立場の職員から現地事情につき説明し、少なくとも以下の３点は明らかに述べて、本人の訓練入所・協力隊参加の意思を、再確認すること。（仮にこの段階で辞退しても、不利な取扱いを避け、例えば「有資格」等の取り計らいを考慮する）

▽プロジェクトに配属の隊員であり、プロジェクト・マネジャー（JICA派遣専門家・かつ協力隊員ＯＢ）の指揮下に入ること。（所定の活動に従事する・活動自体は個別であることは一般隊員とそれほどの違いがなくても、通常の「個別派遣」ではないこと）
▽宿舎が、同僚隊員やアセアン各国派遣者と共同であること。（個室は確保）
▽治安上の観点から、月～金のワーキングデーは、門限が午後７時と決められており、所定の安全注意事項を遵守すること。

２－５－２　派遣前訓練中に徹底を期する事項

同期のカンボディア隊員と同じカリキュラム以外に、特に「任国事情」の時間を増設して、「三角協力」の説明を徹底する。以下の諸点につき解説、指導すること。

▽「三角協力」の意義、経過の概要、現況、今後の展望等、一連のブリーフィング
▽安全の徹底、健康管理の必要（精神衛生上の注意）
▽共同宿舎について。そのルール、生活事情、等
▽一般隊員と異なる（取扱いがあれば、その）相違点、異なる理由・事情
▽英語学習の特段の重要性（加えてクメール語の勉強についてもふれること）

なお、訓練中に辞退を申し出た場合は、慎重に相談に乗り意思を確かめながらも、相応の対処（通常は「退所」）を行い、特別の取り計らい（別の派遣方法）は考慮しない。

２－６　「三角協力」についての総括所見――「南々協力」について等

１．プロジェクト全体を通じ、かねて予想をしていたよりも、はるかに成功裡に動いている、という印象を得た。

もっとも、その印象には、次の２つの状況に考慮する要があるかも知れない。

一つは、モニタリング＝中間評価に際して、自国の大使館員や派遣国チームのリーダーたちが巡回視察するのであるから、特にアセアン４ヵ国専門家たちには、その活動ぶりを「よく見せたい」「この機会にアピールしよう」という考えが、強くあったであろうことは想像に難くない。

しかし、現実に困難や障害があってうまく動いていないのであれば、いくら「よく見せよう」と企てたところで、どこかにほころびが見えるはずである。そういう「暗い影」は、まず見えなかったし、むしろ次項に記すように、アセアン派遣者たちの“活気”が印象的であった。

他の一つは、諸条件に恵まれたことである。３日間のモニタリング活動中、雨季の最中であったから時に相当の雨に見舞われたものの、天候はじめ自然条件は概して落ち着いていた。さらに重要なことは、安全面での問題や不安がまったくなかったことである。このため、予定の日程・行程がほぼ計画通りに順調・無事に進行したことは幸いであった。

２．印象深かったのは、アセアン専門家たち・そのほとんどすべてが、初めての海外途上地域での技術協力活動であるはずであるが、快活に胸を張って、自分たちの活動ぶりを説明し、カウンターパートを紹介し、質疑に応答している場面であった。

先発の途上国が、後発の途上国を援助する「南々協力」の、まさに“走り”のプロジェクトであるが、それぞれに、国ごとの“名誉”を担っているかのように活動している状況は、頼もしくもあり楽しくもあった。これからの「南々協力」にとって、よい経験の蓄積の始まりとなることを期待したいものである。

３．同様に印象深く感じたのは、アセアンの技術活動が、後発途上国・カンボディアの現実に適合しそうに思われることである。

インドネシアの家畜飼育専門家が、稲わらをアンモニア処理し、牛の飼料に使う方法を簡易な飼料サイロを使って実演した；フィリピンのポストハーベスト指導の女性専門家が、現地産のフルーツを材料にしたピクルスや菓子類の作り方を教えていた；タイの公衆衛生専門家によるトイレットづくりの指導、等々、それぞれ現地事情に合致できそうに思える。住民たちが徐々にでも覚え・作り・使う（生かす・売る）という方向に進めば、今後の協力の進展は、有効・有益と言えるであろう。

４．協力隊のシニア隊員・短期緊急隊員たちは、アセアンからの派遣者に比べると、落ち

着いて淡々としている印象を受けた。全員が隊員ＯＢ・ＯＧゆえにそうであるのだろうが、むしろ控え目な印象さえあった。アセアンの専門家を引立て、「黒子に徹する」という言葉も聞かれた。それが意図したもので、その通りの結果が出ているとすれば、大したものである。

実際にどうか。「黒子」発言が、余分な遠慮につながる気遣いはないか。プロジェクト延長という局面になると、これまでと多少違った動き方が求められるかも知れない。

５．隊員・アセアン専門家を問わず、プロジェクトが、現地住民の自立を考えて、外から機械・機材を持ち込むのを控え、現地で available な資源（労働力も資源の一つ）・材料を活用する方針を堅持しつつ活動していることにも、強い印象をもった。

学校の建設・修理は、その典型である。資材の確保から労力の提供まで、「現地主義」を尊重して進めている。「木工教室」や「煉瓦積み作業」をタイやマレイシアの専門家が教え、その「製品」が学校に納入される話や、建設工事が、その学校の先生たちの手で、あるいは村民の合意による労力提供によって進められ、技術指導を、マレイシアの建築大工、煉瓦積みの専門家が指導する、という仕組みは、自立自助の気風を興すことにつながる。

６．農村地域開発は「草の根レベル」の協力でありたい。巡回視察して、村民と密着型の活動が多いと見受けられた。

しかし、その生かし方、つまり普及の仕方、村民の納得・共感・理解は、これからであるように思われる。２州にまたがる地域農民に、各種のデモンストレーションをどう広げ、普及活動をどう進めてゆくかは、大きい問題である。さらに、稲作主体の農民が、野菜・果樹の栽培にも手を広げられるか、またどう広げてゆくか、牛の飼育や飼料の改善にどう乗り出すか、保健衛生や所得の向上を、どのように実現してゆくか等々は、これからの課題となる。それらの課題に、アセアン専門家たちがどう取組み、どう解決・達成してゆくか、始まったばかりの「南々協力」の本番は、これからといってよい。

７．農村地域開発は、様々な分野、様々な技術技能が、相互に関わり合いながら進行してゆく integrated development であると考えられる。現在の協力分野である農畜水産業＝稲作、野菜・果樹栽培、家畜飼育、養殖などに、公衆衛生、幼児・学校教育、手工芸・洋裁等々が、相互関連の中で成果をあげてゆくには、１年の活動期間では、いかんともしがたい。これから１～２年、状況の進展によってはそれ以上の長期にわたって有効な協力を続けて行くことが必要と思われる。

関連していえば、一部の分野での活動は、始まったばかりであった。例えば、水産養殖は、洪水のために当初の計画をやり直し・出直しであった。職業訓練も、緒についたばかりのコースが多い。アドバンス・クラスへの進級も必要となろう。協力延長がぜひ必要と

考えるゆえんである。

その状況下、アセアン専門家間には、さらに活動を続けたい、あるいはその必要があると表明している者が少なくない。「南々協力」の一層の進展と成果のためにも、喜ばしいことである。関係諸国の取組みに、これまで以上に熱意が加わることを期待したい。

８．アセアン専門家たちは、各国ごとの「チーム志向」になりがちのように見える。その国のチーム内での連携は、実に良好と見受けたが、各国縦割りの様相では、アセアンとの共同・「三角協力」の意義は薄れる。今後は、農業分野、公衆衛生など、様々な国の同分野の専門家間で、情報・意見の交換から始め、ゆくゆくはそれぞれに特色を生かしながらも、共通の目標を立てて共同で活動し・評価し合うことが出来るように、「三角協力」の実効を上げてほしいと期待している。

そのような活動の方向に、協力隊員、特にシニア隊員が、積極的な役割を果たしてゆくことを、特に期待している。

＜この項、以上＞

３．プノンペン市内の隊員活動

カンボディア派遣隊員は、既述の「三角協力」隊員（シニア／短期緊急派遣隊員）を除く１２名全員が（「三角協力」と区別し、適切な表現ではないが、ここでは「一般隊員」と呼称しておく）、プノンペン市内において協力活動を行っている。（添付の派遣状況表ならびに配置図を参照）

飯田職員は、その全１２隊員の活動状況を各配属先で視察し、かつ協力隊連絡所に一泊あるいは住居を視察する等、各隊員と懇談する機会を得たが、松崎は、「三角協力」モニタリング活動参加を優先し、したがって一般隊員の活動視察はごく限定されたものになった。

視察できたのは、①プノンペン大学で秋山・ＳＥ、岡野・日本語両隊員、②プレアコマッソ訓練校において、平沢・工作機械、馬渡・電子機器、富沢・自動車整備の３職業訓練隊員、のそれぞれ現況であり、現場で若干の意見交換をするに止まった。

以下は、それについての感想と意見である。

①プノンペン大学は、カンボディア唯一の国立大学であるから、建物・設備は不十分であろうとも、 prestige も potentialも高いはずであって、今後とも、最も有効な協力先であると考えられる。現在実施中の日本語コースは、岡野隊員によれば、選択科目にもあげられていない由で、いわば同好会的な存在と思われるが人気度は高いそうであり、今後の努力・成果次第では、“格上げ”もあり得よう。日本語コース自体が、日本文化の紹介・文化交流の側面をもっていることを思えば、協力隊にとって大事な協力分野であり、今後とも可能な協力を継続できるようにすべきであると考える。

②秋山隊員の活動は、コンピュータ指導の有資格者が、配属先の「コンピュータ・センター」長と、同隊員の２人だけといわれ（同センターの Dr.Nenh Baromの話。同氏はセンター長ではない）、貴重であり評価を受けている。

同氏は、明年から数学科の中に「コンピュータ・コース」を新設する計画であり、隊員の増派遣を求めたい旨を述べたが、当方は、その計画について趣旨・目的、コース内容等を記述した説明文書をＪＩＣＡ事務所に提出して頂ければ好都合であるが、それより先に、協力隊の趣旨・活動等を知ってもらうためにも、ＪＩＣＡ事務所から必要な情報提供（パンフレット送付など）を行うようにしたい、と応答した。

③プレアコッソマ訓練校の現行コースは、生徒を選抜して訓練する学校形式ではなく、一般人の速成訓練を主としている。訓練ニーズがあって実施するのは適正であるが、隊員によると、訓練を終了しても就職先が見つからない由であり、政府関係も民間の事業体も、技能者の雇用・受入れが順調にできる状況には、ほど遠い現状であると考えざるを得ない。

隊員の士気にも影響しかねないが、そうかといって打開の方向は、経済・社会の復興と活性化、民間企業の復活といった局面変化しかないように思われる。

④限られた時間ではあったが、隊員の意見や希望を尋ねると、業務活動はもとより行動の範囲が、さほど広いとはいえないプノンペン市内に限られ、いわば“閉塞状態”に置かれていることが大きい。治安上の制約とはいえ、差し当たり状況好転が望めないとすれば、例えばスポーツ・競技会の計画であるとか、アンコール遺跡ツアーの情報・支援とか、可能な対策を考えてしかるべきであろう。たまたま任国外旅行から帰任した平沢隊員が、その“効用”を実証するように、一際活気ある動きと話し振りを見せてくれたのが印象に残った。